



金屋町通信

発行元：

金屋町まちづくり協議会

発行責任者：般若陽子

編集責任者：般若慎一郎

上の写真は、大寺幸八郎商店前にある、おなじみのラジオ体操少年の銅像です。観光客が銅像と同じポーズをとって記念写真を撮っているのをよく見かけます。さりげなく置いてある銅像が、とても素敵に、鑄物の町の雰囲気をつくっていると思いませんか。

重伝建の説明会

10月上旬に、3会場において文化財課から重伝建選定へ向けての説明会があった。今回は、歴史的背景・景観的特質・地域コミュニティの範囲、などを考慮して絞り込んだ地区範囲が、地図によって初めて具体的に示された。それによると、金屋八番街など全く現代の景観になってしまっている地域は範囲に入れていない。また金屋本町の千保川沿いの工場地域などは、経営への配慮から範囲に入れていません。



ひ孫の代へ、金屋町400年の伝統と文化を伝えていきたいと考えるならば、早急に重伝建に選定していただくことが大きな力になると思うのですが、いかがでしょうか。

八丁道おもしろ市20周年記念

まちづくりシンポジウム

10月15日、ホテルニューオータニ高岡において主題のシンポジウムが開催され、パネリストの一人として般若陽子さんが出演し、金屋町まちづくり協議会の活動事例を発表しました。他には、愛知県の中川区まちの魅力発信隊、福井県大野市、中山道中津宿「六斎市」実行委員会、八丁道おも

しろ市実行委員会などから代表が出演し、富山大学の渡辺康洋教授がコーディネーターを務めました。ちなみに金屋町まちづくり協議会では11月23日に、大野市へ先進地視察研修に出かける予定にしています。



多くの意見が出されたが、町づくりに必要なことをキーワードで表現すると、拠点作り、若者の取り込み、人材育成、協働、自己革新、コラボ、継続などになるようです。

ワールド日本海

ママチャリラリー2011



10月2日、富山市グランドプラザを出発し金沢市しいのき迎賓館（旧石川県庁）を目指すツールド日本海ママチャリラリーおよそ120台が午前中に金屋町を駆け抜けました。これは金屋町楽市でおなじみの伊東順二教授が実行委員長を務め、今回が第3回になるものです。

飛見丈繁展

を通じて感じたこと

鑄物資料館長 般若慎一郎

10月の約1ヶ月間、鑄物資料館第3展示室において飛見丈繁さんのパネル展示を行ったが、パネル製作や資料整理を通じて改めて丈繁さんの偉大さに感じ入りました。



金屋町に今日まで弥栄節が伝わっているのは、全く丈繁さんのお陰というべきでしょう。ご存知のとおり、弥栄節はもともと金吹きの際にたたら踏み作業のチームワークを整える為に唄われた作業唄でした。時代の変化と共に技術革新によってたたらが電動送風機に置き換わっていくのを目の当たりにして、このままではたたらと共に弥栄節が消えて無くなるという危機感を持ったことから、丈繁さんは弥栄節の保存と普及活動に取り組みました。

18年間も団長を務めた消防団で、弥栄節の第一人者であった老子治右衛門さんと共に活動し親しい間柄であったことは、今日まで伝えてもらった弥栄節にとってとてもラッキーでした。

昭和11年には富山県から要請を受けて、東京で

の全国民謡民舞大会に参加しました。昭和30年には松本市から要請を受け、松本城大修理完工記念の全国選抜郷土芸能祭に北陸代表として推薦を受け参加しました。現在では富山県の民謡と言えば八尾のおわら節がダントツに有名ですが、当時の富山県代表は弥栄節だったようです。

老子治右衛門さんが唄っている元唄を展示期間中に流しておきましたが、元唄は抑揚に乏しく素人には唄いにくいものです。丈繁さんは専門家に依頼してメロディーを改善し、踊りの振り付けもしました。そして毎年の御印祭と弥栄節をセットにしたことで、見事に保存に成功したものです。丈繁さんは弥栄節の文化的価値を高く評価し、文部省技官らの勧めもあって国の無形文化財とすべく申請手続きもしました。どのような経緯で不首尾に終わったのかは定かではありませんが、今や弥栄節は金屋町だけでなく高岡市の宝になっていますから、今日再びそのような動きをしてみるのもいいのではないのでしょうか。

金屋町開町400年記念展

まちづくりの父～新保昭一

期間：11月6日（日）～12月4日（日）

場所：鑄物資料館第3展示室



新保さんが残してくれた昭和50年代の新聞記事を中心にパネルを展示し、金屋のまちづくりの歴史をふり返り、今後目指すべき方向を考える機会にしたいと考えています。入場無料ですので、どうぞお越しください。

金屋町開町400年記念
シリーズ
金屋町と高岡鑄物の歴史

今回はお休みとさせていただきます。